

平成 21 年
1 月 28 日

病害虫発生予報 2 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目 次 >

．今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：ハダニ類，アブラムシ類	1
施設野菜（イチゴ，ピーマン，トマト，キュウリ）：灰色かび病	2
促成トマト：黄化葉巻病	2

【その他の病害虫】	3
イチゴ，促成ピーマン，促成キュウリ	

．病害虫ミニ情報

水稲種子伝染性病害虫の防除対策について	4
---------------------	---

．今月の気象予報

．テレホンサービス

029(226)5321

本文に記載された農薬の登録内容は，平成 21 年 1 月 1 日現在のものです。

農薬登録速報については，農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
<http://www.maff.go.jp/nouyaku/> 内の登録速報を参照してください。

詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
	多い	県下全域

[予報の根拠]

1月中旬現在、被害葉率は平年より高い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

発生が多くなると防除が困難になるため、発生状況をよく観察する。なお、冬期に発生が見られると、気温の上昇にともない春期の発生が多くなる傾向があるので注意する。

薬剤散布にあたっては、下葉を取り除き、葉裏や葉柄にもよく付着するよう十分な量で丁寧に散布する。また使用回数、収穫前日数にも十分注意する。

薬剤抵抗性ハダニ類の出現を防ぐため、同一薬剤の連用はさける。

2. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
	多い	県下全域

[予報の根拠]

1月中旬現在、寄生葉率は平年より高い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

発生状況をよく観察する。なお、冬期に発生が見られると、気温の上昇にともない春期の発生が多くなる傾向があるので注意する。

薬剤散布にあたっては、下葉を取り除き、葉裏や葉柄にもよく付着するよう十分な量で丁寧に散布する。また使用回数、収穫前日数にも十分注意する。

薬剤抵抗性アブラムシ類の出現を防ぐため、同一系統薬剤の連用はさける。

施設野菜（イチゴ、ピーマン、トマト、キュウリ）

1. 灰色かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

1月中旬現在、平年並の発生である。

気象予報によると、向こう1か月の天気は曇りや雨の日が平年並が多いと予想されることから、ハウス内は多湿になりやすく発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

ハウス内が多湿になると発生が助長されるので、換気、送風、暖房等によりハウス内の湿度を低く保つ。

発生した場合は、発病部位を取り除き、ハウス外に持ち出して処分する。

発生の少ないうちに、防除を徹底する。

薬剤散布は、薬液が乾きにくくなる午後からは行わず、晴れた日の午前中に行う。また、曇雨天が続く薬液が乾きにくい場合は、くん煙剤を利用する。

薬剤は、十分な量で丁寧に散布する。また、耐性菌の出現を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

促成トマトの黄化葉巻病について

[現在の状況]

1月中旬現在、数地点の促成トマト圃場で発生を確認した。

[防除対策]

発病が認められた株は感染源となるため、すみやかに処分する。

黄色粘着板を設置し、ウイルス媒介虫タバココナジラミの発生推移をよく観察する。

薬剤散布にあたって、タバココナジラミは葉裏に寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。

防虫ネットの設置は防除対策として重要であるため、設置していない場合は次作の対応として、ハウスの開口部に防虫ネット（0.4mm目合い以下）を設置し、タバココナジラミのハウスへの出入りを防止する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並～やや多い	1月中旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の気温は高く，日照時間は平年並か短いと予想され，発生を助長する条件である。
	コナジラミ類	発生量：平年並～やや多い	1月中旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の気温は高いと予想され，発生を助長する条件である。
ピーマン 促成	斑点病	発生量：平年並～やや多い	1月中旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想され，発生をやや助長する条件である。
促成 キュウリ	べと病	発生量：平年並～やや多い	1月中旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想され，発生をやや助長する条件である。
	褐斑病		
	ミナミキイロアザミウマ	発生量：やや多い	1月中旬現在，平年よりやや多い発生である。

水稻種子伝染性病害虫の防除対策について

水稻種子は毎年更新することが基本です。通常の採種ほ産種子は消毒種子となっていますが、未消毒の種子を使用する場合には種子消毒を徹底してください。

水稻の種子伝染性病害虫には、ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病、イネシンガレセンチュウなどがあります。これらを防除するためには、種子の段階で適切な防除（消毒）を行うことが重要です。

1. 種子消毒の方法

【採種ほ産種子（消毒種子）の場合】

採種ほ産種子（消毒種子）には、モミガードC・DFとスミチオン乳剤が吹き付け処理されており、浸種作業を行うと種子消毒ができる。浸種の際は、種もみ1kgに対して水4リットルとし、3日間は水を換えないようにする（次ページの作業の流れとポイントの浸種以降を参照）。

【未消毒種子の場合】

- (1) 温湯処理：60 の温湯に10分間の浸漬処理で、いもち病、ばか苗病、イネシンガレセンチュウ等を防除することができる。ただし、処理水温・時間は正確に行い、処理後は水中で速やかに冷却する等の注意が必要である。
- (2) 生物農薬：表の薬剤（薬剤名の後ろに（生）の記載があるもの）が農薬登録されている。使用方法により適用病害虫が異なる場合があるので注意する。
- (3) 化学農薬：薬剤は表を参考にする。処理方法は、浸漬、塗沫、湿粉衣がある。薬剤によって利用できる処理方法が異なるので注意する。

病害虫 薬剤	ばか苗病	いもち病	ごま葉枯病	もみ枯細菌病	苗立枯細菌病	褐条病	苗立枯病(リゾプス菌)	苗立枯病(トコゲル菌)	苗立枯病(フザリウム菌)	イネシンガレセンチュウ
スポルタック乳剤										
トリフミン水和剤										
ヘルシード水和剤										
スターナ水和剤										
スポルタックスターナSE										
テクリードCフロアブル										
モミガードC・DF										
スミチオン乳剤										
エコホープ (生)										
エコホープDJ (生)										
タフブロック (生)										
モミゲンキ水和剤 (生)										
モミホープ水和剤 (生)										

表 種子伝染性病害虫に適用のある主な種子消毒剤（平成21年1月1日現在）

- 注) 1 使用にあたっては、農薬のラベル等をよく読み、使用基準を確認する。
 2 種子消毒に用いた薬剤も農薬の総使用回数にカウントされる。
 3 スミチオン乳剤については、製造会社により稲に登録が無い場合があるので、注意する。
 4 薬剤名の後の（生）は生物農薬を示す。

2. 播種までの作業の流れとポイント

種子の選別（自家種子の場合）（塩水選）

自家もみを種子として用いる場合には、塩水選を行って充実した良質のもみを選別する。塩水は、うるちでは比重 1.13（水 10 リットルに対し食塩約 2.7 kg または硫安約 3 kg）、もちでは比重 1.08（水 10 リットルに対し食塩約 1.7 kg または硫安約 1.8 kg）に調整する。塩水選後は沈んだ種もみをよく水洗いし、水を切って塩分をできるだけ取り去る。

やむを得ず自家種子を使う場合には、種子伝染性の病害虫が発生していない水田から収穫した健全なもみを使用し、種子消毒を実施する。

種子消毒（薬剤処理）

浸漬処理

種もみと薬液の容量比は 1:1 以上とする（めやすは種もみ 1kg に薬液 2 リットル以上）。薬液の中で種もみを入れた網袋をよくゆすり、もみ表面に薬剤を均一に付着させる。長時間浸漬（5 時間以上）の場合は、浸漬中に薬液を 1~2 回攪拌する。薬剤によっては薬液から引き上げた種もみは水洗いせず日陰に広げて 24 時間程度放置し、種もみに薬液を乾燥・固着させるものもある。

水温は 10~15 とする。低すぎると、薬剤の効果が低下する場合がある。

塗沫処理

適当な容器内で種もみを攪拌しながら薬液を滴下するなどして種物を均一に付着させる。

湿粉衣

種もみが湿った状態で薬剤を均一にまぶす。

浸種

流水中では薬剤が洗い流されてしまうので、バケツやコンテナ等に溜めた水に浸漬する。河川、ため池などで行わない。

種もみと水の容量比は 1:2 とする（めやすは種もみ 1kg に対して水 4 リットル）。水を交換する場合は、3 日以上経過してから上澄みを静かに流し、新しい水を追加する。水温は 10~15、水温積算温度（水温×日数）で 100~120（水温 10 で 10~12 日間）とする。めやすは「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」は 120、「ゆめひたち」は 110、他の品種は 100 である。ここで十分に浸種しないと、出芽が揃わない原因となるので注意する。

催芽

催芽の程度は、出芽を揃えるために必ずハト胸状態とする。

催芽や出芽時の高温条件は、病害の発生を助長するので、加温条件は 28~30 程度とし、必要以上に高めないようにする。ハウスや日の当たる場所で管理すると、昼間は予想以上に水温が高くなる場合があるので注意する。

播種

播種量が多すぎると病害の発生を助長するので適正な播種量を守る。用土や資材は病原菌のないものを用いる。必要に応じてこれらも消毒する。

育苗

育苗中に発生する病害の対策として、適正な温度・水管理で育苗し、健苗育苗を心がける（これらについては次回以降に掲載予定）。

留意事項：

種子消毒の残液、薬液および容器・器具などの洗浄に使用した水は、かんがい水路、排水路、河川、湖沼などの水系には流さないでください。

・ 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 1月24日から2月23日)

気象庁 (1月23日 発表)

< 向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	30	50
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は平年に比べ曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

< 1週目の予報 > 1月24日(土曜日)から1月30日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

< 2週目の予報 > 1月31日(土曜日)から2月6日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

< 3週目から4週目の予報 > 2月7日(土曜日)から2月20日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

・ テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号 : 029 (226) 5321

2月上旬 施設野菜の灰色かび病の防除対策について

2月下旬 果樹類の休眠期防除と果樹カメムシ類の発生予想について

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。